

日本の外来哺乳類—管理戦略と生態系保全

編者：山田文雄 池田 透 小倉 剛
出版社：財団法人 東京大学出版会

平成10年12月国土交通省（当時は建設省河川局）による「河川における外来種対策」として「外来種影響・対策研究会」がスタートして今年で15年目に入る。これまでに数種類の冊子（広報・啓発用として）を発刊し多くの方々の目に留まっている。全国の河川に係わる担当者の意識についても年々変化し特に平成18年2月の特定外来生物として陸上5種類（オオキンケイギク、オオハンゴンソウ、ナルトサワギク、アレチウリ、オオカワジシャ）が国土交通大臣による防除の公示がされ関心度は一気に高まった。全国の河川管理者アンケートにおいて、外来種による被害の対策等の実施ありと回答した数値は208件（H17）から570件（H20）と大きく2.8倍となった。また、平成2年から進められている「河川水辺の国勢調査」において確認された外来種数は795種（植物で556種、哺乳類等は12種、その他227種）で総確認種数18669種の4.3%であった。哺乳類は総確認種数118種に対して約10%と他の外来種に比べて比較的大きい割合となっている。

今回、発刊された「日本の外来哺乳類」は、日本への外来哺乳類導入から拡大・影響と対策等について解りやすくまとめられている書籍である。特に「日本の哺乳類の現状」においては、大昔からの実態として外来哺乳類が存在していたこと。明治の開国以来、多くの哺乳類が産業利用やペット飼育等として日本に輸入され高度経済成長の一部になっていたことなどが興味深い。「日本の哺乳類問題」において「外来種」が引き起こす問題は、時代の変化により社会経済から引き離された外来生物が自然に放逐されたこと。特にヌートリアについては、生態繁殖が著しいため急速に拡大し農業生産物の被害が大きいことと住みかとして河川堤防等に巣穴を設けて生息することである。これは河川管理者としてたいへん大きな問題であり場所によっては緊急の対策が必要と考えられる。現在の生息範囲が近畿圏や中国地方に限定されている様であり、水系や地域単位での対策をすすめる、駆逐の成功事例を多く作る事が今後の対策を進める上で大事な事であると考えられる。

また、アライグマについては「あらいぐまラスカル」の放映効果も手伝って大量のペット用アライグマが日本に輸入された。現在、アライグマは全国へ分布拡大しているが特に北海道、関東、中部、近畿圏に集中している。被害実態の内容については、農業生産物への被害が際だっているが民家の屋根裏への侵入や京都や鎌倉などの古都に住み着き重要文化財への被害等が問題となっている。掲載されたその他の哺乳類も含めて国や県及び自治体や市民を中心とした地域連携による外来種対策の体制づくりが重要であると感じた。

主要目次

- I 外来哺乳類の現状と対策
- II 日本の外来哺乳類問題
- III 外来哺乳類対策の新視点

